

社会の在り方について考える力が育つ社会科学習

名古屋市立豊臣小学校教諭 前 原 憂 輝

I 研究のねらい

対立を深める国際情勢や急速に発達する情報技術の進歩などに伴い、子どもが社会の中心となって活躍する2040年代は、「VUCA」と称される先行きが不透明で予測困難な時代を迎えるとされている。このような変化の激しい時代に対応していくためには、人々の願いを捉えた上で、その願いが実現された理想とする社会の姿を思い描く力や、理想とする社会の実現に向けて必要となる取組について考える力を身に付ける必要がある。学習指導要領でも、グローバル化する国際社会を主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎の一つとして、「社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で、習得した知識などの中から自分たちに協力できることなどを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして判断する」ことができる力の育成が求められている。

一方で、奈良教育大学准教授澁谷友和氏は、「起こる確率の高い未来を予測し、価値判断や意思決定する授業では（中略）自分たちの未来を積極的に考えようとは思わないのではないだろうか」と、従来の未来予測型授業の課題を指摘している。実際に、私の今までの実践においても、社会の在り方について考えさせると、現在の社会の課題が部分的に解決された未来を答える子どもや、「解決は難しいから」と考えることを諦めてしまう子どもの姿も見られた。先行きが不透明で予測困難な時代を迎えようとしている現在だからこそ、限定された起こり得る未来だけでなく、様々な未来の可能性を考慮した上で、「社会の在り方について考える力」を育成することは意義深いと考える。

私が考える「社会の在り方について考える力」が育った姿とは、人々の願いの実現に向けた複数の取組を総合的に評価することで、現在の社会における良さと課題を捉え、さらに、人々の願いが達成された「希望ある未来」にするために、現在における取組が生かせるかどうかを検討した上で、未来に向けた取組を考える姿である。この力を育成することで、先行きが不透明で予測困難な未来に対して、理想とする姿を思い描き、その理想に向けて必要となる取組を考えることができるようになると思う。そこで、本研究では、澁谷氏が「過去や現在の社会事象から起こる確率の高い未来とその影響を予測した上で、それとは逆になる、現時点では起こる確率は低いかもしれないが、自分たちの希望の未来像に着目し、その未来を仮説的に描き、その実現に向けてのシナリオを創り出すこと」と定義した未来洞察の授業構成を取り入れて、「社会の在り方について考える力」を育成していく。

II 研究の方法

1 研究の対象 名古屋市立豊臣小学校 第6学年 31人

2 基本的な考え

本研究では、「つかむ」「現在の社会を捉える」「未来の社会について考える」の3段階を基本的な学習過程として学習を進める【資料1】。まず、社会問題に対する人々の願いについて捉え、その願いに対してどのような取組をしているのかを予想し、学習問題を設定する。次に、願いの実現

段階	主な学習内容
つかむ	○ 人々の切実な願いに対し、どのような取組を行っているのかを考え、学習問題を設定し、学習計画をつくる。
現在の社会を捉える	○ 人々の願いの実現に向けた取組について調べる。 ○ 現在の取組について評価することで、現在の社会における良さと課題を捉える。
未来の社会について考える	○ 社会の課題が解決が果たされなかった「起こり得る未来」を考え、将来の社会について想像する。 ○ 「起こり得る未来」とは逆の「希望ある未来」を考え、逆算的に現在の取組の強化や、取組同士の組合せ、新たな取組の創出などを考え、「希望ある未来」に向けた取組について考える。

【資料1 基本的な学習の流れ】

に向けた取組について調べ、評価することで、現在の社会における良さと課題を捉える。その後、社会における課題の解決が果たされなかった「起こり得る未来」について資料を基に考え、将来の社会について想像する。さらに、「希望ある未来」を描き、逆算的に現在行うべき活動や取組を考える「バックキャスト思考」を取り入れ、現在の取組の強化や、取組同士の組み合わせ、新たな取組の創出について考える。このような学習過程を通して、社会の在り方について考える力を育成していく。

(1) 「シャカイングカード」とレーダーチャートを用いた評価活動

「現在の社会を捉える」段階では、現在の社会における良さと課題を捉えるために、調べる視点を設定し、人々の願いの実現に向けて、どのような取組があるのかを調べる。その際、取組の名称や取組内容、人々にとってどのような効果があるのかを一つの取組につき1枚の「シャカイングカード」にまとめる。まず、取組の効果を記入する上段【資料2】の枠のみを提示し、調べ学習を進める。次に、資料から解消すべき点を読み取るために、「お金」「時間」など、読み取りの観点が見された下段【資料3】の枠を提示し、読み取った解消すべき点について観点ごとにチェック欄にチェックする。その後、上段と下段を合わせた「シャカイングカード」を学級で共有し、各取組の効果や解消すべき点について共通理解を図る。最後に、「シャカイングカード」を基に、グループでレーダーチャートを用いて各取組を総合的に評価する【資料4】。

このような活動を取り入れることで、人々の願いの実現に向けた現在の社会における良さと課題を捉えることができるようにする。

取組の名称
【ナゴヤわくわくプレゼント事業ベビーエール】 金

ナゴヤわくわくプレゼント事業

BABY YELL!

ベビーエール

【取組の説明】
カタログから、合計50,000ポイント(5万円相当)分を、各家庭の必要に応じて選択し、注文することができる。

【この取組をすると、家庭にどんな効果があるのかな】
他に必要なものを買うことができるようになったり、貯蓄することができるようになったりする。

【資料2 「シャカイングカード(上段)」】

【充実した制度にしていくなために解消しなければならない点を考えて、□にチェックをしよう】

お金 時間 人 場所

【資料3 「シャカイングカード(下段)」】

(2) 「ドリームシャカイングカード」の作成

「未来の社会について考える」段階では、資料を提示し、数十年後の「起こり得る未来」について捉える。次に「起こり得る未来」とは逆の、人々の願いが実現され、課題が解消された「希望ある未来」を考える。この「希望ある未来」に対し、どのような取組をしていけばよいかを考える。その際「シャカイングカード」(現在の取組)を基に、現在の取組の強化や、取組同士の組合せ、新たな取組の創出など、複数人で意見交換しながら考える。その後、具体的な取組の内容や、社会に与える効果を考え、「ドリームシャカイングカード」を作成する【資料5】。最後に、「ドリームシャカイングカード」を基に、提案書として自分の考えをまとめる。

このような活動を取り入れることで、人々の願いが実現された「希望ある未来」に向けて、現在における取組が生かせるかどうか検討することができるようになり、未来に向けた取組を考えることができるようにする。

【レーダーチャートによる評価】

【評価の観点】
「お金」「時間」「人」「場所」

【評価の仕方】

- 解決すべき課題がない場合を4点とする。
- 評価の観点に関する課題があれば、1点ずつ減点していく。
- 各取組の評価を行い、取組のまとめりとして捉えることで、現在の社会における良さと課題を明らかにする。

○点数が高い→現在の社会における良さ
○点数が低い→現在の社会における課題

【取組のまとめり】

例：「子育て支援の願いを実現する政治」
視点のまとめり『子どもを預かる支援』
『ここなご』（未就学児が利用できる教育・保育施設、事業所を探せるサイト）
『サポート事業活動』（「依頼会員」と「提供会員」の相互援助）
『一時預かり事業』（緊急時やリフレッシュ時に、一時的に預かってもらえる事業）

【資料4 取組のまとめりにおける良さと課題を明らかにするレーダーチャート】

「BABY YELL」の良いところに、「なごみーアプリ」のアプリで手続きができる良さを組み合わせることで、アプリ内でどんな商品が自分の家庭に合うか相談できる取組を考えただけで、どうかかな。

良い取組だね。私は「ここちゃっと」のSNSアプリを使って気軽に相談できるという点も生かせると思う。「ドリームシャカイングカード」にしてみよう!

「シャカイングカード」を持ち寄って、カードの強化を考えたり、組み合わせたりするなど、現在の取組が生かせるかどうか検討して、「ドリームシャカイングカード」を作成する。

シャカイングカード

シャカイングカード

シャカイングカード

➔

ドリームシャカイングカード

ドリームシャカイングカード

「一時預かり事業」は運営する人や場所が少ないという問題点があるけど、子どもが来てほしい保育園や託児所が行えば、PRにつながるから家庭にも保育園にも良い取組にならないかな。

確かに良い取組だけど、保育士にとっては、いつ預けられるかわからないから負担が増えてしまうかもしれないよ。

【資料5 「ドリームシャカイングカード」の作成】

Ⅲ 子どもの実態

- 1 調査日 5月21日～6月3日
- 2 調査方法 質問紙による実態調査、授業における記述分析
- 3 調査対象 名古屋市立豊臣小学校 第6学年31人
- 4 記述調査の結果と考察

(1) 現在の社会における良さと課題を考えたことがあるか（調査1）

質問紙で「①政治などの社会の動きに関心があるか」「②米価格高騰に対して、備蓄米の放出や生産量の見直しといった一つ一つの取組から、米価格高騰対策（現在の社会）の良さと課題について考えたことがあるか」について問い、その人数をクロス集計した【資料6】。その結果、社会の動きに関心があると回答した子どもであっても、現在の社会における良さと課題について考えたことがある子どもは4人にとどまっているこ

現在の社会における良さと課題について考えたことがあるか					n=31
社会の動きに関心があるか	はい (○)	どちらかといえばはい (○)	どちらかといえばいいえ (△)	いいえ (△)	
はい	1人	1人	1人	1人	4人
どちらかといえばはい	0人	2人 A児	7人	1人 B児	10人
どちらかといえばいいえ	0人	0人	2人	7人 C児	9人
いいえ	0人	0人	0人	8人	8人
	1人	3人	10人	17人	31人

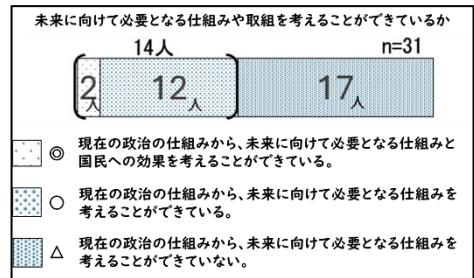
【資料6 質問紙による実態調査結果】

とが分かった。また、社会の動きに関心がない子どもについては、ほとんどが現在の社会の良さと課題について考えた経験がないという結果となった。このことから、子どもは、社会の動きについての関心の有無にかかわらず、現在の社会における良さと課題を捉える手段が身に付いていないと考えられる。そこで、本研究では、子どもが大人になっても社会の課題として続くと予測されている課題を提示する。その課題解決に向けた取組と、その取組を評価することができるような工夫を取り入れる。そうすることで、現在の社会における良さと課題を捉えることができるようになると思われる。

(2) 未来に向けて必要となる仕組みや取組を考えることができているか（調査2）

単元「国の政治のしくみと選挙」において、「今後、国の政治の仕組みはどうなっていけばよいか」について記述した内容を分析した【資料7】。

「今の政治は、国民の意見を踏まえた仕組みになっているからこのままでもよいと思うが、より手軽に政治の意見を伝えられるところをつくると、今の日本に足りないところや、良いところが分かりやすくなり、新しい取組もできると思う」の



【資料7 授業における記述分析】

ように、未来に向けて必要となる政治の仕組みを考えることができた子どもが31人中14人いた。一方で、今後の政治の仕組みを考えることができなかった子どもは31人中17人いた。

このような実態から、人々の願いが実現された「希望ある未来」を考え、その未来の実現に向けて、現在の仕組みや取組を基に、より充実した仕組みや取組にしたり、仕組みや取組同士を組み合わせたりするなど、現在の仕組みや取組を再検討できる工夫を取り入れる。そうすることで、理想とする未来を思い描き、その未来に向けて必要となる仕組みや取組を考えることができるようになると思われる。

5 観察する子どもについて

実態調査を受けて、本研究で観察する子どもを3人抽出した。調査結果は、以下に示すとおりである。

	調査1	調査2	子どもの実態
A児	○	△	現在の社会における良さと課題について考えたことはどちらかといえばあると回答した。一方で、未来の社会がどうなってほしいのか、現在の社会の様子から考えているが、必要となる仕組みについて考えることはできていない。
B児	△	△	現在の社会における良さと課題について考えたことはないと回答した。未来の社会がどうなってほしいのか、自分の思いはもっているが、どうすれば実現できるかについては考えることができている。
C児	△	△	現在の社会における良さと課題について考えたことはないと回答した。また、未来の社会がどうなってほしいのか想像することができず、未来に向けて必要となる仕組みを考えることができている。

IV 第1次授業研究（6月）

1 単元 子育て支援の願いを実現する政治

2 目標

経済的な支援や預かり支援などに関する取組に着目して調べ、子育て支援の願いを実現するための行政の取組を理解できるようにする。また、未来における行政の子育て支援の在り方について考え、適切に表現することができるようにする。

3 検証項目

- (1) 「現在の社会を捉える」段階において、「シャカイングカード」を基に、名古屋市の子育て支援についてレーダーチャートを用いて評価することは、現在の社会における良さと課題を捉える上で有効か、学習のまとめシートの記述からつかむ。
- (2) 「未来の社会について考える」段階において、「希望ある未来」に向けて、「ドリームシャカイングカード」を作成する際に、現在の社会における取組が生かせるかどうかを検討することは、未来に向けた取組を考える上で有効か、提案書の記述からつかむ。

4 実践の概要

段階	主な学習内容
つかむ	第1時 子育て支援の願いに対し、名古屋市はどのような取組を行ったのか予想し、予想を基に学習問題①を設定し、学習計画をつくる。 学習問題① 名古屋市は、どのように子育て支援の願いを実現しているのだろうか。
	第2時 人々の願いを実現するための、地方議会での役割について調べる。
	第3時 「経済的な支援」「子どもを預かる支援」「悩みを聞いてもらう支援」の三つの調べる視点を設定し、学習問題を解決していくための順序を考え、学習計画を立てる。
現在の社会を捉える	第4～6時 学習計画に沿って、子育て支援を実現するための取組について調べ、取組の内容や効果を「シャカイングカード」にまとめる。
	第7時 各取組の解消すべき点を資料から読み取り、「シャカイングカード」に追記する。
	第8時 「シャカイングカード」を基に、名古屋市の子育て支援制度について評価し、学習問題①について自分の考えをまとめる。 【検証場面1】
未来の社会について考える	第9時 名古屋市の子育て支援における課題が続くと訪れる未来「起こり得る未来」と、願いが実現された「希望ある未来」について考え、学習問題②をつくる。 学習問題② 希望ある未来を実現するためには、どのような取組が必要なのだろうか。
	第10時 「希望ある未来」にするための取組について、現在の子育て支援の取組を基に考え、「ドリームシャカイングカード」にまとめる。
	第11時 「ドリームシャカイングカード」を基に、未来における子育て支援の提案書を作成し、学習問題②について自分の考えをまとめる。 【検証場面2】

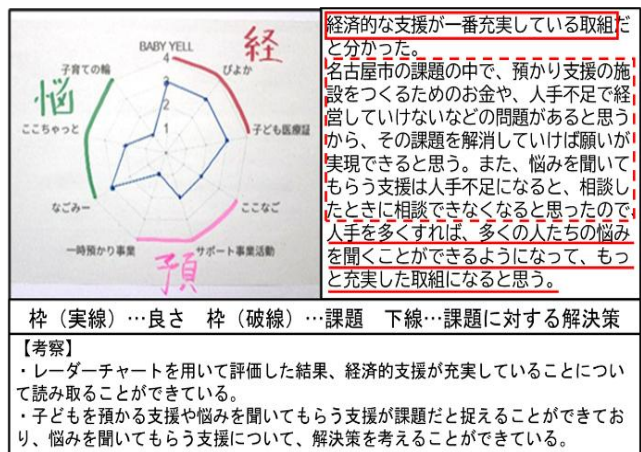
5 第1次授業研究の様子と考察

(1) 検証場面1（第7～8時）

「経済的な支援」「子どもを預かる支援」「悩みを聞いてもらう支援」の三つの子育て支援の良さと課題を捉えるために、グループで、レーダーチャートを用いて各取組について評価した。評価の仕方は、解消すべき点がない場合を4点とし、「お金」「時間」「人」「場所」に関する課題があれば、1点ずつ減点していくこととした。

各取組の解消すべき点を捉える活動において、A児は、「シャカイングカード」の下段に書かれた観点に基づいて、配付された各取組の資料から読み取りをすると、「経済的な支援はどの取組も財源の確保が課題になっている」「子どもを預かる支援は、人手が足りなくて預けたいときに預けられない」などと、観点に基づいて解消すべき点を捉えていた。その後、シャカイングカードを基に、友達と話し合いながら子育て支援の評価を行った。完成した

レーダーチャートを見て、グループの友達と「経済的な支援はどれも点数が高い」や、「子どもを預かる支援は全体的に点数が低い」と、気付いたことを伝え合った。名古屋市における子育て支援の良さと課題を個人で記述させると、A児は、現在の社会における良さと課題を捉えている記述が見られ、課題に対する解決策についても記述することができた【資料8】。一方、C児は、「シャカイングカード」の下段に書かれた観点に基づいて、資料から読み取りをして



【資料8 レーダーチャートから読み取った、A児の考える良さと課題】

いたが、資料のどの部分から、何を読み取ればよいのか分からない様子だった。資料の読み取りが終わった後の「シャカインカード」の下段を見てみると、「お金」「時間」「人」の観点に基づいて、解消すべき点については捉えることができていたが、「場所」の観点についてはほとんど捉えていなかった。その後、「シャカインカード」を基に、グループでレーダーチャートを用いて各取組を総合的に評価した。C児は「悩みを聞いてもらう支援」の「子育ての輪」（中村区の子育て中の親子の交流を促進し、地域で子育ての仲間づくりができる場）について話しており、取組の良さについて気付いていた。しかし、完成したレーダーチャートから子育て支援の良さと課題を記述させると、各取組を子育て支援として総合的に捉えておらず、「子育ての輪」という取組としての良さについて記述し、課題についての記述は見られなかった【資料9】。

(2) 検証場面1の結果と考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
現在の社会における良さと課題を捉え、課題の解決について考えることができる。	現在の社会における良さと課題を捉えることができる。	現在の社会における良さと課題を捉えることができない。
24人		7人 (C児)
8人 (A児)	16人 (B児)	

A児やB児のように、現在の社会における良さと課題を捉えることができた子どもは31人中24人いた。これは、各取組の効果と解消すべき点を「シャカインカード」にまとめ、レーダーチャートを用いて各取組について総合的に評価を行ったことで、現在の社会における良さと課題を視覚的に捉えることができたからだと考える。

一方で、C児のように、現在の社会における良さと課題を捉えることができなかった子どもは31人中7人いた。これは、各取組の解消すべき点を捉える活動の際に、「お金」「時間」「人」「場所」という読み取りの観点を子どもに十分に理解させることができなかったからだと考える。また、「一時預かり事業は、緊急時に預けたいと思っても事前の打ち合わせが必要で、すぐに受け入れてくれるところがない」と、「時間」と「場所」のどちらの解消すべき点として挙げればよいか分かりにくかったからだと考える。その結果、各取組の解消すべき点を捉えていない状態で、レーダーチャートを用いた評価をすることになり、各取組を総合的に評価することができなかつたと考える。

(3) 検証場面2 (第10~11時)

「希望ある未来」に対して、どのような取組をすればよいのかを、「シャカインカード」を基に考えた。また、取組を考える方法として「更に良い取組にするための取組の強化」「取組同士の組合せ」「新たな取組」と三つの方法を提示した。複数人で「希望ある未来」にするための取組について考えた後、個人で「ドリームシャカインカード」を作成し、提案書にまとめた。

B児は「お金や預ける場所に困らず、安心して過ごせる未来」を考えた。B児が「お金に困らない未来だから『BABY YELL』（出産した家庭に5万円分のクーポンを支給し、カタログから欲しい商品を選ぶことができる制度）を生かそうと思う」と発言すると、グループの友達は「預ける場所にも困らない未来だから、預ける場所に困らない取組もできるといいね」と発言した。B児は「預かり支援に『ここなご』（未就学児が利用できる教育・保育施設、事業所を簡単・便利に探せるサイト）があったから、それを参考にしてみる」と発言し、「BABY YELL」と「ここなご」を組み合わせた取組を考え、「ドリームシャカインカード」

を作成した。また、「預け先やお金に困る人が減り、子どもを産もうとする人が増える」と、取組の効果についても考えていた。その後、考えた取組を基に、提案書としてまとめることができた【資料10】。

<p>B児の考えた未来 「子どもが生まれたとき、お金や預ける場所に困らず、安心して過ごせる未来」</p> <p>【「ドリームシャカイングカード」を作成する際に行われた話し合い】</p> <p>「お金に困らない未来」だから「BABY YELL」を生かそうと思う。</p> <p>預ける場所にも困らない未来だから、預ける場所にも困らない取組もできるというね。</p> <p>他</p> <p>預かり支援に「ここなご」があったから、それを参考にして、「BABY YELL」と「ここなご」を組み合わせた取組を考えてみる。</p>		<p>私たちは、子育て支援がより充実したものになるように、社会科の授業で未来の子育て支援の取組を考えました。私の考えた未来は、「子どもが生まれたとき、お金や預ける場所に困らず、安心して過ごせる未来」です。</p> <p>私は、「ここなご」と、「BABY YELL」を合体させた取組を考えました。内容は、「ここなご」のサイトを使うことで、「BABY YELL」のポイントが追加で、5,000ポイントゲットできます。</p> <p>そうすることで、<u>金銭や預かり先で困る人が減り、子どもを産もうとする人が増える効果があると考えました。</u></p>	<p>「希望ある未来」と考えた取組が対応している。</p> <p>取組を行うことによる効果が書かれている。</p>
<p>下線（実線）…「希望ある未来」 下線（破線）…効果 枠…考えた取組</p>			

【資料10 B児の「ドリームシャカイングカード」の作成の様子と記述した提案書】

C児は「給料が十分にもらえて、子どもが安全に遊べ、相談相手が訪問してくれる未来」を考えた。C児は、「給料が十分にもらえる」という部分から「経済的な支援」における取組から生かせることがないか友達と話し合っていた。「『BABY YELL』をもっと強化したらよさそう」と友達に伝えると、友達も賛同したことで、「5万円相当のクーポンを一度だけもらえるところを、5年間1か月ずつに3万円ずつもらえる『BABY YELL（強化版）』」という取組で「ドリームシャカイングカード」を作成した。最後に提案書にまとめたが、「希望ある未来」に対応したものではなかった。

(4) 検証場面2の結果と考察

A（十分満足できる）	B（おおむね満足できる）	C（努力を要する）
現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組とその効果を考えることができる。	現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組を考えることができる。	現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組を考えることができない。
24人		7人（C児）
12人（A児、B児）	12人	

A児やB児のように、現在の取組を検討し、「希望ある未来」に対応した取組を考えることができた子どもは31人中24人いた。これは、「希望ある未来」に対する取組を考える際に、現在の取組の強化や、取組同士の組合せといった現在の取組を基に検討したことで、「希望ある未来」に向けて、どのような取組が必要なのかを考えやすくなったからだと考える。

一方で、C児のように、現在の取組が生かせるかどうかを検討し、「希望ある未来」に対応した取組を考えることができなかった子どもは31人中7人いた。これは、未来に向けた取組を考えていたものの、その取組が「希望ある未来」とどのように関係するのかを検討しなかったことが原因だと考える。その結果、友達と取組について話し合う場面においても、取組の内容が「希望ある未来」と対応しているかどうかより、考えた取組について、具体的にどのような取組内容にしていくのかという内容の話し合いになり、カードを作ることが目的になってしまったと考える。

V 長期研修で学んだこと

1 奈良教育大学准教授 澁谷 友和 氏

澁谷氏から、未来洞察型授業では、「希望ある未来」を考える上で、根拠を明確にして未来を構想することが必要であり、子ども同士が協働的に未来に向けた取組を考えることが重要であると御指導をいただいた。第2次授業研究では、子ども同士が協働的に未来に向けた取組を導き出すことができる工夫を考えたい。

2 関西学院大学教授 吉水 裕也 氏

吉水氏から、子どもの思いを優先して社会を評価すると、現実の社会と乖離してしまうため、子どもの思いと科学的知識を往還させることが重要であると御指導いただいた。第2次授業研究では、レーダーチャートを用いて評価する際に、子どもが資料を基に判断できるようにするための工夫を考えたい。

3 大阪教育大学理事・副学長 峯 明秀 氏

峯氏から、子どもの考えた取組に対し、批判的な意見をもらう場を設けることで、具体性と現実性を高め、学びを深めることができると御指導いただいた。第2次授業研究では、子どもが考えた取組を検討するための基準を設定し、グループで取組を検討できるようにするための工夫を考えたい。

4 敬愛大学教授 佐藤 孔美 氏

佐藤氏から、課題を捉える際に、根拠となるデータのどこに着目させるのかを意識させて導き出すことが有効との御指導をいただいた。第2次授業研究では、子どもが課題を見いだすことができるように、読み取りの観点を精選し、取組の良さや課題を捉えることができるようにするための工夫を考えたい。

5 福岡教育大学教授 坂井 清隆 氏

坂井氏から、現在の子育て支援に課題があるという前提で単元を構想しており、子どもが現状を高く評価し、課題を見いださなかった場合の対応を考えておくことを御指導いただいた。そのため、第2次授業研究では、資料から課題を見いだすことができるようにするための工夫を考えたい。

VI 第2次授業研究に向けての改善点

1 検証項目1について

取組の解消すべき点を捉えるための資料の読み取りの観点について、「時間」「場所」を統合し、「時間」とする。また、「お金（コスト）」「人（人の感情や思いなど）」「時間（手間）」と具体的な言葉を付け加えて観点を示す。そうすることで、各取組の解消すべき点を捉え、レーダーチャートを用いた評価を通して、現在の社会における良さや課題を捉えることができるようにする。

2 検証項目2について

友達と取組について考える際に、「『希望ある未来』に対応した取組となっているか」「更に良い取組にすることはできないか」という取組を検討するための基準を設定する。そうすることで、「希望ある未来」に向けた取組を考えることができるようにする。

VII 第2次授業研究（10月）

1 単元 世界の未来と日本の役割

2 目標

食品の大量廃棄を防ぐ取組や二酸化炭素の排出が少ない移動手段の取組などに着目して調べ、地球温暖化の進行を緩やかにするための日本の取組を理解できるようにする。また、未来における日本の持続可能な社会の在り方について考え、適切に表現することができるようにする。

3 検証項目

(1) 「現在の社会を捉える」段階において、各取組の解消すべき点を捉えるための資料の読み取りの際に、「お金（コスト）」「人（人の感情や思いなど）」「時間（手間）」と具体的な言葉を付け加えて観点を示すことは、各取組の解消すべき点を捉え、レーダーチャートを用いた評価を通して、現在の社会における良さや課題を捉える上で有効か、学習のまとめシートの記述からつかむ。

(2) 「未来の社会について考える」段階において、「未来と考えた取組が対応しているか」「更に良い取組にすることはできないか」という取組を検討するための基準を設定することは、未来に向けた取組を考える上で有効か、提案書の記述からつかむ。

4 実践の概要

段階	主な学習内容
つかむ	第1時 地球温暖化対策をしてほしいという願いに対し、日本はどのような取組を行っているのかを予想し、予想を基に学習問題①を設定し、学習計画をつくる。 学習問題① 日本が行っている地球温暖化対策は、人々の生活にとってどのような良さや課題があるのだろうか。 第2時 地球温暖化を含め、貧困や紛争など世界の諸問題の解決に向けた、国際連合の各機関や日本のODAやNGOの役割について調べる。 第3時 「食に関すること」「移動に関すること」「住まいに関すること」の三つの調べる視点を設定し、学習計画を立てる。
現在の社会を捉える	第4～6時 学習計画に沿って、地球温暖化を緩やかにするための取組について調べ、取組の内容や効果を「シャカインカード」にまとめる。 第7時 各取組の解消すべき点を資料から読み取り、「シャカインカード」に追記する。 第8時 「シャカインカード」を基に、日本の地球温暖化対策について評価し、学習問題①について自分の考えをまとめる。【検証場面1】
未来の社会について考える	第9時 地球温暖化対策における課題が続くと訪れる未来「起こり得る未来」と、願いが実現された「希望ある未来」について考え、学習問題②をつくる。 学習問題② 「希望ある未来」にするためには、どのような取組が必要だろうか。 第10時 現在の地球温暖化を緩やかにするための取組を基に「希望ある未来」にするための取組について考え、「ドリームシャカインカード」にまとめる。 第11時 「ドリームシャカインカード」を基に、未来における地球温暖化対策の提案書を作成し、学習問題②について自分の考えをまとめる。【検証場面2】

5 第2次授業研究の様子と考察

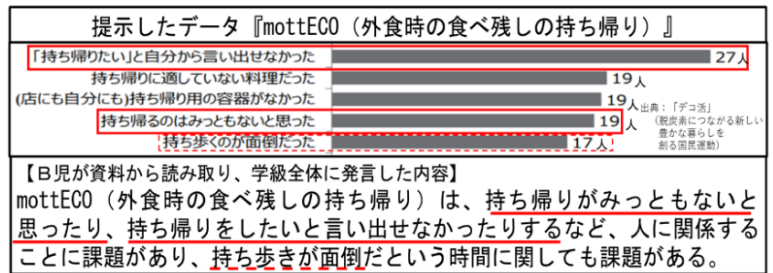
(1) 検証場面1 (第7～8時)

調べた九つの取組について「お金(コスト)」「人(人の感情・思いなど)」「時間(手間)」と、読み取りの観点を示した上で、資料の読み取りを行い、各取組の解消すべき点を「シャカインカード」の下段にチェックした。その後、完成したシャカインカードを基にグループでレーダーチャートを用いて各取組を総合的に評価した。

B児は、『mottECO(外出時の食べ残しの持ち帰り)』の課題を示すデータを提示した際に、観点を基に解消すべき点を捉えていた【資料11】。その後、「シャカインカード」を基に、グループでレーダーチャートを用いて各取組を総合的に評価し、学習のまとめシートに地球温暖化対策の良さと課題を記述した。B児は、「移動に関すること」を良さとして捉え、「住まいに関すること」を課題として捉えていた。また、全体的に子どもが取り組めることが少ないことに気付き、「食に関すること」を例に、子どもと大人で異なる解決策を考えていた【資料12】。

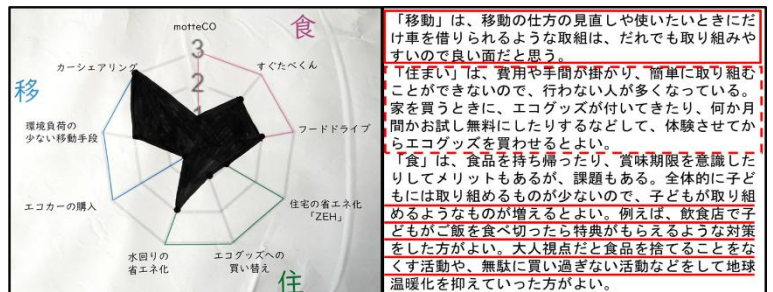
C児も、「シャカインカード」下段のチェック欄に、読み取りの観点を基に解消すべき点を資料から読み取ってチェックをしていた。さらに、グル

ープでレーダーチャートを用いた評価を行った際には、「住まいに関することは、どの取組もコストが掛かるし、家を建て替える必要性を感じていなかったり、まだ省エネ商品に替えなくていいという人の思いがあったりするから、取組全体として進んでいないと思う」と「お金」や「人」に関する解消すべき点について発言した。学習のまとめシートの記述には、「移動に関することは全体的に取り組みやすい。住まいに関することは経済的な負担も買い替える手間も掛かる」とあり、「移動に関すること」を良さとして捉え、「住まいに関すること」を課題として捉えていた。また、「お店では、保存容器を無料化したり、食べ残し厳禁にしたりして、食品ロスを減らせるとよい」と、食に関することの課題に対して解決策を記述した。



下線(実線)…人に関すること 下線(破線)…時間(手間)に関すること

【資料11 提示した客観的データ(九つのうち、一つを抜粋)】



枠(実線)…良さ 枠(破線)…課題 下線…課題に対する解決策

- ・レーダーチャートを用いて評価した結果、移動に関することを良さとして読み取ることができている。
- ・住まいに関することや食に関することが課題だと捉えることができている。食に関することについては、子どもと大人で解決策を分けて考えることができている。

【資料12 レーダーチャートから読み取った、B児の考える良さと課題】

(2) 検証場面 1 の結果と考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
現在の社会における良さと課題を捉え、課題の解決について考えることができる。	現在の社会における良さと課題を捉えることができる。	現在の社会における良さと課題を捉えることができない。
28人		3人
15人 (A児、B児、C児)	13人	

A児やB児、C児のように、現在の社会における良さと課題を捉えることができた子どもは31人中28人いた。これは、観点を精選するとともに、具体的な言葉を付け加えて観点を示したことで、資料から各取組の解消すべき点を捉えやすくなり、レーダーチャートを用いた評価に生かすことができたからだと思われる。一方で、現在の社会における良さと課題を捉えることができない子どもが3人いた。これは、複数の観点を同時に意識しながら、解消すべき点を資料から読み取ることが難しかったことが原因だと考える。

(3) 検証場面 2 (第10~11時)

初めに、子ども一人一人が地球温暖化を緩やかにするための「希望ある未来」を考えた。「希望ある未来」を考えた後に、「シャカインカード」を基に、どのような取組ができるのかを個人で考えた。次に、考えた取組について、グループで「『希望ある未来』と対応しているのか」「更に良い取組にすることはできないか」という基準で、検討し合った。グループでの検討後、個人で「ドリームシャカインカード」を作成した。最後に、「ドリームシャカインカード」を基に提案書としてまとめた。

C児は、「ガソリン車をなくして、全ての車をエコカーにする未来」を考え、「エコカーの普及」という取組を強化し、世界のガソリン車を回収してエコカーを普及させる「世界エコカー計画」という取組を考えた。次に、考えた取組は「『希望ある未来』と対応しているのか」という基準で、グループで検討した。

検討の結果、C児の考えた取組は「希望ある未来」と対応しているとグループの意見が一致した。また、「更に良い取組にすることはできないか」についてもグループで検討した。C児はグループでの検討を経て、「世界のガソリン車を回収し、リサイクルして、その部品でエコカーを作る」という取組を考え「ドリームシャカインカード」にまとめた。「ドリームシャカインカード」を基に記述した提案書には、取組の効果についても考えることができた【資料13】。

C児の考えた未来
「ガソリン車をなくして、全ての車をエコカーにする未来」

【「希望ある未来」と取組が対応しているかどうかの話し合い】

①「希望ある未来」と考えた取組の対応について

C 「エコカーの普及」という取組を強化して「世界エコカー計画」という取組を考えました。これは、世界のガソリン車を回収し、普段乗る車をエコカーにする取組です。この取組は「希望ある未来」に対応していますか。

他1 「ガソリン車を無くす」が「ガソリン車の回収」で、「全ての車をエコカー」が「普段乗る車をエコカーにする」だから、対応していると思います。

②更に良い取組にするために

他2 ガソリン車の部品をリサイクルして、エコカーを作る取組にしたら、もっと良い取組になると思います。

【提案書】

私の考えた未来は、「ガソリン車をなくして、全ての車をエコカーにする未来」です。

私は「世界エコカー計画」という取組を考えました。この取組は、各国が連携して、世界のガソリン車を回収、リサイクルして、その部品でエコカーを作る取組です。この取組を実施すると、二酸化炭素の排出が減り、環境に優しい車が多くなるため、地球温暖化を緩やかにすることができると思います。

下線(実線) …「希望ある未来」 下線(破線) …効果 枠…考えた取組

【資料13 C児のグループの検討の様子と、C児の考えた提案書】

(4) 検証場面 2 の結果と考察

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組とその効果を考えることができる。	現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組を考えることができる。	現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組を考えることができない。
28人		3人
17人 (A児、B児、C児)	11人	

A児やB児、C児のように、現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組を考えることができた子どもは31人中28人いた。これは、友達と取組について考える際に、「『希望ある未来』に対応した取組となっているか」「更に良い取組とするためにはどのようにすればよいか」という取組を検討するための基準を設定したことで、「『希望ある未来』にするための取組を考える」という目的を意識しながら、考え

た取組について検討し合うことができたからだと考える。一方で、現在の取組を検討し「希望ある未来」に対応した取組を考えることができない子どもが3人いた。これらの子どもは、現在の取組内容から大きな変化のない考えにとどまっていた。これは、現在の取組内容を十分に理解しないまま検討したことが原因だと考える。

VIII 研究のまとめ

1 研究から明らかになったこと

(1) 社会の在り方について考える力の育成

「①現在の社会における良さと課題を捉えることができたか」と「②未来に向けた取組を考えることができたか」の2点についてクロス集計した。その結果、第1次授業研究に比べ、第2次授業研究では、両項目を共に達成できるようになった子どもが増加した【資料14】。以上から、「シャカ

		現在の社会における良さと課題について考えることができたか			n=31
		A	B	C	
未来に向けた取組を 考えることができたか	A	5人	7人	0人	12人
	B	2人	8人	2人	12人
	C	1人	1人	5人	7人
		8人	16人	7人	31人

		現在の社会における良さと課題について考えることができたか			n=31
		A	B	C	
未来に向けた取組を 考えることができたか	A	8人	8人	1人	17人
	B	5人	4人	2人	11人
	C	2人	1人	0人	3人
		15人	13人	3人	31人

第1次授業研究と第2次授業研究のクロス集計の結果を比較した。第1次授業研究では、「CC」の人数が5人だったが、第2次授業研究では0人になった。また、「AA」「AB」「BA」「BB」の人数も22人から25人と増加している。さらに「AA」「AB」「BA」の合計人数も増加している。

【資料14 第1次授業研究と第2次授業研究のクロス集計の比較】

イングカード」とレーダーチャートを用いた評価活動や、「希望ある未来」を考え、現在の取組が生かせるかどうかを検討し「ドリームシャカイングカード」を作成する活動は、社会の在り方について考える力の育成に有効であることが明らかになった。

(2) 実践後の子どもの様子

第2次授業研究後に、学区の良さと課題について考える活動を行った。子どもは、「学区に暮らすお年寄りが、ボランティアで登下校の見守り」をしていることや、町内対抗の運動会があることを良さと捉えた。課題としては、老若男女が過ごせる公園がある一方で大人数が過ぎせないことや、学区にスーパーマーケットがないことを挙げた。この現状から、「起こり得る未来」として、学区で暮らしたいと思う人が減り、子どもが減少し、豊臣小学校がなくなるかもしれないという未来を導き出した。C児は、「学区に幼い子をもつ夫婦が住み、子どもの人口が増えることで、豊臣小学校がこれからも続く」という「希望ある未来」を考え、「学区に暮らすお年寄りの登下校の見守り」と「老若男女が過ごせる公園」を組み合わせ、「学区に暮らすお年寄りが、公園で遊ぶ子どもの安全を見守る」という取組を考えた。このように「希望ある未来」を考え、その未来に向けた取組を考えようとしている姿から、研究の成果が表れていることを感じた。

2 今後の研究に向けて

本研究では、社会問題における人々の願いに対する取組を調べ、評価することで、現在の社会における良さと課題を捉えるとともに、「起こり得る未来」とは異なる「希望ある未来」の実現に向けた取組を考える力を高めることができた。一方で、現在の社会における良さと課題を捉える上で、複数の観点を同時に意識して、解消すべき点を資料から読み取ることが難しかったことが課題として挙げられる。今後は、観点ごとに解消すべき点を読み取ること、現在の社会における良さと課題を捉える活動につなげていきたい。また「希望ある未来」に向けた取組を考える際に、現在の取組を詳しく説明するだけにとどまった子どもがいたことも課題である。「希望ある未来」に向けた取組を考える上で、参考にする現在の取組の概要だけでなく、具体的な取組内容とその効果を改めて調べ直すことが必要だと感じた。

今後も、社会の在り方について考えることができる力の育成を通して、不透明で予測困難な時代に対応できる子どもを育てていきたい。